

高田松原地区震災復興祈念公園のあり方に関する提言（素案）

はじめに

「高田松原地区震災復興祈念公園構想会議」（座長 中井 検裕 東京工業大学大学院教授、以下「構想会議」という。）は、東日本大震災津波の犠牲者を追悼・鎮魂するとともに、震災の記憶と記録を防災文化として国内外に発信し、後世に伝承する場として震災復興祈念公園（以下「祈念公園」という。）を整備するため、そのコンセプトやテーマ及び国と地域の連携のあり方等について検討を行ってきた。

平成 24 年 7 月から 9 月にかけて、市民フォーラムを含む 2 回の会議を開催するとともに、地元代表との意見交換会などを実施してきたところである。

これら構想会議での議論や市民からの意見を踏まえ、祈念公園のコンセプトやテーマ、すなわち祈念公園に求められる役割や機能さらには効果などについてとりまとめたものを提言する。

祈念公園の整備については、引き続き多くの方々の参加を得て議論を深め、そのあり方を検討していくべきであると考えます。本提言は、それら検討における基本的姿勢や具体的取組みの方向性として提起するものである。

平成 24 年 11 月

高田松原地区震災復興祈念公園構想会議

高田松原地区震災復興祈念公園構想会議 委員名簿

有識者

◎座長

氏 名	摘 要
池邊 このみ	千葉大学大学院教授
牛山 素行	静岡大学防災総合センター副センター長・准教授
内藤 廣	東京大学名誉教授
◎中井 検裕	東京工業大学大学院教授
本多 文人	陸前高田市立博物館長

地元代表

氏 名	摘 要
伊藤 明彦	陸前高田市議会議員
佐々木 美代子	陸前高田市地域女性団体協議会会長
高橋 勇樹	陸前高田青年会議所 直前理事長
中井 力	陸前高田商工会事務局長

1. 祈念公園に求められる役割・機能及び効果

(1) 犠牲となった全ての生命（いのち）への追悼と鎮魂

①生命（いのち）の尊さを問い続ける

東日本各地に未曾有の被害をもたらした東日本大震災津波は、平成 23 年 3 月 11 日の発災から 1 年半以上が経過したが、その被害の爪跡は、今もなお、被災地に色濃く残されている状況にある。

岩手県においては、沿岸地域を中心に、4,671 名の尊い生命が失われ、また、1,200 人近い方が未だ行方不明となっているなど、その人的被害は極めて深刻である。

中でも陸前高田市は、県内で最も多くの方が亡くなり、市街地や地域を支える産業に壊滅的な被害を受けた地である。

この地につくられる祈念公園であることを十分に認識し、国内外の方々が今次震災津波で犠牲となった全ての生命に想いを馳せ、生命の尊さを問い続けることが出来る場とする必要がある。

②壊滅的被害を記録し、記憶を継承し、教訓を伝える

東日本大震災津波からの復興、更に、世界で二度と同じ悲しみを繰り返すことなく、人類が自然との共生を図っていくためには、今回の大震災の検証を行い、壊滅的な被害の状況や発災後の活動状況を記録することが必要であり、その記憶を後世に正しく継承していくことが重要である。

高田松原地区を含めた三陸沿岸部は、明治 29 年（1896 年）、昭和 8 年（1933 年）の三陸地震津波、昭和 35 年（1960 年）のチリ地震津波など、過去に発生した津波で大きな被害を受けた経験を持つ津波の常襲地域である。

しかし、チリ地震津波から半世紀以上が経過し、これらの教訓が、今次災害において必ずしも十分には活かされなかったのではないかと指摘もある。

祈念公園は、今次震災津波の被害の大きさや被災体験を記録し、記憶を継承することで、記憶の風化を防ぐ場とする必要がある。その際、被災建物などの災害遺構は、災害の記憶の継承や津波研究において貴重なものとなる。祈念公園予定地には、「道の駅高田松原・タピック 45」をはじめとした災害遺構があり、地域の方々の声を十分に尊重しながら、その保存に努めるとともに、これら災害遺構を活かして地域の方々が語り部となって、後世にこの教訓を伝えていくことが望まれる。

③復興への想いを国内外に発信する

東日本大震災津波は、極めて甚大な災害であり、この震災からわが国がどのように復興を遂げるのかは、国際的にも注目を集めている。

また、祈念公園予定地には、東日本大震災による大津波を受けた高田松原の約7万本の松の中で一本だけ耐えた「奇跡の一本松」があり、悲嘆に暮れる東北の被災地域全体に希望と勇気を与える復興のシンボルとして国内外から大きな注目を集める存在となっている。陸前高田市では、その一本松を後世に受け継いでいくため、モニュメントとして保存することを決定した。

さらに、現在、被災自治体の祈念公園の中でも最大規模で検討が進められている高田松原地区の祈念公園は、被災地域のみならず、日本の再生に向けた復興への強い意志を、国内はもとより国際的支援を受けた海外に向けても明確に示す役割と責務を有するものである。

(2) 自然環境と地域の再生

①350年の歴史をもつ高田松原を再生する

祈念公園予定地に存在した「高田松原」は、後背地を塩害や飛砂等から守り、さらには高田や今泉のまちと人々の生命を守るべく、不毛の砂州に約350年前に菅野空之助が、それに続き松坂新右衛門が私財を投げうって造林したことから始まる。以来、度重なる津波のたびに工夫を重ねながら再造林、補植を繰り返し、世代を越えた地元住民の一貫した取り組みによって築き、育て、創造されてきた。

このような年月を重ねた「高田松原」は、白砂青松の厚みを増す中で、景勝地として、また観光地としての価値を高め、国立公園や名勝などに指定されるとともに、東北有数の海水浴場になるなど、陸前高田に欠かせない環境資産となっていた。

また、何よりこの地域に生まれ育った人々にとっては、子供の頃から慣れ親しんだ原風景であり、復興計画策定段階で実施した市民意向調査結果によれば、7割以上の方が「高田松原」の再生が必要と回答している。

このように地域に親しまれ、また、広く全国に認められた「高田松原」は、東日本大震災で発生した10メートルをはるかに超える大津波に呑み込まれ、「奇跡の一本松」を残し、ほぼ全ての松がなぎ倒され壊滅した。

幾多の津波災害を乗り越えてきた歴史を踏まえ、地域固有の自然や歴史、文化に根ざした復興への力強いメッセージを国内外に発信するとともに、地域に暮らす人々の原風景を取り戻すためにも、再び、最先端の技術と地域の人々の手によって「高田松原」を再生することが必要である。

②古川沼をはじめとする自然とのふれあいを再生する

祈念公園予定地に存在していた「古川沼」は、気仙川などによって形成された沖積平野の海岸部に発達した砂丘に海が仕切られることによって、約 1000 年前に形成されたと考えられている岩手県内最大の自然湖沼であった。

昭和 35 年（1960 年）のチリ地震津波によって大きな被害を受けた後、沼から海への水路に設けられた鉄製のゲートが閉じられ閉鎖水域となり、生活排水の流入などによる水質の悪化が進行したが、地域におけるさまざまな努力の積み重ねにより、水質の改善が見られ、水鳥の姿も再び見られるようになるなど、地域の人々の環境意識の醸成にも寄与してきた。

また、水質悪化が進む以前の「古川沼」では、釣りや水遊びなど、地域の方々が自然にふれあう貴重な水辺空間でもあった。

このように、自然とふれあい、また自然環境の保全意識を高める「古川沼」を再生することは、自然のもつ再生力の再認識とともに、生命の尊さを問い続けるという視点からも重要である。

③津波防災文化をテーマに交流拠点を再生する

明治三陸地震津波以降の約 120 年間の全国における大津波犠牲者（約 4 万 7 千人）の約 6 割（約 2 万 7 千人）が岩手県に集中しており、三陸地域は全国を代表する津波常襲地帯であると言える。

そのような厳しい環境の中で、まちと人々の生命を守る松原を築いてきた陸前高田市をはじめ三陸地域の人々は、世代を超えた地元住民の一貫した取組みによって、幾多の津波災害などの自然災害を乗り越え、いわば克災の文化を形成してきた。さらに、それぞれの地域の特性によって豊かな自然の恵みを最大限享受し、自然の脅威を最小化する叡智に基づき、独自の歴史・文化・産業を育んできた。

今次震災津波からの復興、更には、世界で二度と同じ悲しみを繰り返すことなく、人類が自然との共生を図っていくためにも、祈念公園は、世界の叡智を集めて防災に関する学術的・実践的な研究を行うフィールドになるとともに、その成果を「津波防災文化」として普及・教育する拠点的功能を担い、「津波防災文化」をテーマに国内外のさまざまな方々の交流の場となることが望まれる。

また、研究や普及・教育の拠点施設については、「岩手県東日本大震災津波復興計画」で示されている「国際研究交流拠点形成プロジェクト」と連携しながら、拠点の具体的内容や祈念公園との関係などのについて検討していくことが期待される。

④祈念公園と連携してまちの賑わいを再生する

東日本大震災津波により、沿岸部の多くの事業者が甚大な被害を受け、また内陸部の事業者も深刻な間接被害を受けるなど、地域の経済は大きな危機に直面している。

復興祈念公園は、東日本大震災津波により壊滅的な被害を受けた被災地の復興の象徴であるだけでなく、観光や教育の資源となり、地域振興や地域の活性化などの面でも大きな役割を担う必要がある。

そのため、地域の復興計画や復興事業と密接に連携を図りながら、復興まちづくりと一体となって地域の再生に貢献する祈念公園となることが望まれる。

⑤祈念公園での市民参画が地域コミュニティの再生に貢献する

東日本大震災津波により、多くの被災者の方々は、他の市町村の区域に避難、または住居の移転を余儀なくされるなど、地域コミュニティの衰退が懸念されている。

地域の方々が、祈念公園の検討段階ではそのあり方を話し合い、整備の段階では、松原の再生など自然を再生する場に参加し、運営管理の段階においても、施設の運営管理や被災の教訓を伝える「語り部」など公園を舞台にした地域活動に参画できるような仕組みづくりをすることが望まれる。

このように、公園整備の検討段階から整備後の永きにわたり、地域のコミュニティを再生し、市民が活動する機会や空間を提供し続ける役割を担うことが必要である。

2. 今後の検討の進め方

本提言は、これまでの構想会議での議論や市民からの意見などを踏まえ、陸前高田地区震災復興祈念公園に求められる役割や機能、さらには効果などについて、ここに提言するものである。

今後、ここでは触れられていない公園利用者の避難路や避難場所の確保等、公園そのものの安全確保のあり方など、来年度以降進められる公園の基本計画等の検討にあたっては、多岐にわたる視点での議論が必要である。

この提言が、地域住民をはじめ、より多くの方々による議論を誘発するとともに、公園の整備や運営管理の各段階における、さまざまな主体の参画の足がかりになることを望むものである。

【参考】

○ これまでの検討経緯

平成 24 年 7 月 3 日 第1回 高田松原地区震災復興祈念公園構想会議

【検討事項等】

- 事務局からの報告
 - ・ 陸前高田市の復興計画と公園の位置づけ
 - ・ 公園に関する岩手県及び国などの動き
- 意見交換
 - ・ 高田松原地区震災復興祈念公園のあり方

平成 24 年 7 月 31 日 高田松原地区震災復興祈念公園構想に関する意見交換会

【検討事項等】

- 事務局からの報告
 - ・ これまでの検討状況について
- 意見交換
 - ・ 市民とともに考え、市民とともに守り育てる震災復興祈念公園

平成 24 年 9 月 2 日 陸前高田 市民フォーラム「高田松原の公園について語る」
(第 2 回高田松原地区震災復興祈念公園構想会議)

【検討事項等】

- 事務局からの報告及び話題提供
 - ・ これまでの取組み及び検討状況について
 - ・ 国内外の公園事例の紹介
- 意見交換
 - ・ 高田松原の地で新たにつくる公園にかける期待・思いなど

○ 今後の予定

平成 24 年 11 月～12 月	提言素案について意見募集(1 ヶ月間)
平成 25 年 2 月頃	第4回 高田松原地区震災復興祈念公園構想会議
平成 25 年 3 月	提言公表